

社交性の「製作所」

ピエール＝イヴ・ボルペール

訳 田瀬望 見瀬悠

ドミニク・プロはその刺激的な著書において、啓蒙期の都市を「社交都市」と定義した¹。18世紀の人々は、君主や教会によって公認された社団よりも制約の少ない結社の枠組みを切望していた。彼らは依然として有力者の庇護を求めていたとはいえ（庇護者の栄光や寛大さの公表——献辞や名誉職——という形で貢献と引き換えに、自律性が保証されるからである）、個人の自発的加入という原理を重視した。それゆえ、規約は、特許状の授与のように外部から与えられるのではなく、内部から練り上げられ、起草され、採択された。こうした集団への個人の自発的加入の原理は、伝統的な社交関係との根本的な断絶であるが、「連続性の中の断絶」である。というのも、それは旧体制期の規則や身分の違いを維持することと極めて上手に折り合いをつけていたからである。サロンの人間関係を統御する平等主義の建前は、フリーメイソン会所において俗界での称号や地位に向けられた尊敬と同様に、こうした事実を明白に証明する。自発的社交空間の発展は、私的領域の膨張と自律化を反映すると同時に、不均衡や軋轢が明らかな公的領域に対して、より調和的な社会編成の様式を提案するという、私的領域の側が持つ能力をも示している。セシル・マリ＝トロジャニによれば、「私生活と社交は、啓蒙期の人々が抱いた混交する二つの渴望、幸福追求の二つの表現であり、自我の開花のために割り当てられた空間と、単数の他者だけではなく複数の他者の存在が不可欠になる空間を同時に浮き彫りにする」のである²。

社交空間と公共圏

1960年代末以降、ソシアビリテは文化史や文化的実践の社会史の領域において遂行される研究の中心にある。1966年に初版が出版されたモリス・アギュロンによる『旧体制期プロヴァンスにおける改悛苦行兄弟団員とフリーメイソン——南仏人の社交性に関する試論』は、兄弟団やフリーメイソン会所、会員採用の社会学、一つの社交形態から他の形態への移行に関するモノグラフィ研究への着手を促したのみならず、会員によってなされた社会的・物質的・文化的・宗教的实践に対する関心を際立たせた³。アギュロンはこの著作において、諸々の社交形態の間にある構造的な親族関係を強調した。けれども、これらの社交形態を兄弟団対フリーメイソン会所というように、古い時代と新し

* 本稿は Pierre-Yves Beaupaire, « La « fabrique » de la sociabilité », *Dix-huitième siècle*, n° 46, 2014, p. 85-105 の翻訳である。訳出にあたり、ピエール＝イヴ・ボルペール『「啓蒙の世紀」のフリーメイソン』（深沢克己編訳、山川出版社、2009年）を参考にした。著者の経歴と研究業績については、同書に収録された深沢克己「ボルペールとフリーメイソン史研究の新地平」を参照されたい。

¹ Dominique Poulot, *Les Lumières*, Paris, PUF, 2000.

² Cécile Mary-Trojani, *L'écriture de l'amitié dans l'Espagne des Lumières*. La Real sociedad bascongada de los amigos del país, *d'après la source épistolaire*, Toulouse, Presses Universitaires du Mirail, 2004, p. XIII.

³ Maurice Agulhon, *Pénitents et Francs-Maçons de l'ancienne Provence. Essai sur la sociabilité méridionale*, Paris, Fayard, 1984 (1ère éd. 1966).

い時代という枠組みにおいて戯画的に対立させるのは適切ではないだろう。彼は変容する社交性の輪郭を描き出したが、それは他方で、1770年代から1820年代にかけての「革命的移行」に関する研究にも対応していた。この時期に、フリーメイソン会所は、旧体制の社交の供給に組み込まれて開花し、それ〔社交の供給〕を解体することなく再構成した。確かに会所は兄弟団と競合したが（会所は当初、兄弟団の中の特殊な類型の一つであったにも関わらず）、会所は兄弟団が「社交界の交際」の需要に対応することを可能にした。文化的実践の社会史の伝統の中で、こうした〔社交形態の定着と開花を左右する〕土壌の調査や実践に対して向けられた特別な関心は、今日においてもしばしば、ソシアビリテを研究するフランスの歴史家たちに特徴的である。それゆえ、彼らは現代社会学の創始者の一人であり、社交を「社会化の遊戯的形式」として研究したゲオルク・ジンメル⁴の先駆的仕事を発見し、取り入れるのが遅かった⁴。実際、モリス・アギュロンは1984年に『改悛苦行兄弟団員とフリーメイソン』の第三版の中で、この研究を行っていたときにはゲオルク・ジンメルの仕事の存在を知らなかったと認めた。ところでジンメルは社交と秘密の両方に関心を持っていた⁵。今日においても、ジンメルを読むことは、ユルゲン・ハーバマスやノルベルト・エリアスとは違って——彼らも受容・議論されるまでに長い時間を要したが——、フランスの歴史家の間で一般化しているとは言い難い。

ダニエル・ロッシュの博士論文『地方における啓蒙の世紀——1680年から1789年の地方アカデミーとアカデミー会員』、続く彼の論文集『文芸共和国市民——18世紀の教養人と啓蒙』は、文化的・学術的な社交組織を研究した⁶。これらの著作は、アカデミーや学術団体を全国的な「社会的事象」として包括的に把握し、パリの枠組みから離れて地方都市をその多様性や自律的な軌跡の中で考察し、会員の社会学、年齢や世代の現象、文通、他の社交組織への同時加入に関する研究を提示した。彼は「個人的人間関係」を研究する必要性を訴え、個人の軌跡を辿ることを促した。「啓蒙期フランスにおける商業と文化」について次のように書いている。「調査領域は広大である。文化的社交組織、フリーメイソン会所、文通や啓蒙の諸制度のネットワークは、卸売商の文化への関与を生き生きと把える機会を次々と与えてくれる」⁷。

フランソワ・フェレの『フランス革命を考える』と、その弟子ラン・アレヴィによる『旧体制期フランスにおけるフリーメイソン会所——民主的社交組織の起源』は、『思想協会』に関するオギュスタン・コジャンの仕事を引き合いに出しながら、フリーメイソン会所の出現のうちに、旧体制の基礎を浸食し革命を予告する「民主的社交組織」の到来を見出した⁸。しかしながら、ドイツの哲学者・社会学者ユルゲン・ハーバマスの著

⁴ Georg Simmel, *Sociologie et épistémologie*, trad. de l'allemand par L. Gasparini, introduction de J. Freund, Paris, PUF, 1991 ; *Sociologie. Etudes sur les formes de la socialisation*, trad. de l'allemand par Lilyane Deroche-Gurcel, Paris, PUF, 1999 (1ère éd. allemande 1908).

⁵ Lilyane Deroche-Gurcel, « La sociabilité : variations sur un thème de Simmel », *L'Année sociologique*, 1993, vol. 43, p. 159-188 ; Lilyane Deroche-Gurcel et Patrick Watier (dir.), *La Sociologie de Georg Simmel*, Paris, PUF, 2002.

⁶ Daniel Roche, *Le siècle des Lumières en province. Académies et académiciens provinciaux, 1680-1789*, Paris, Éditions de l'EHESS, 1984 (1ère éd. 1973).

⁷ Daniel Roche, *Les Républicains des Lettres. Gens de culture et Lumières au XVIIIe siècle*, Paris, Fayard, 1988, p. 289.

⁸ Ran Halévi, *Les Loges maçonniques dans la France d'Ancien régime : aux origines de la sociabilité démocratique*, Paris, Armand Colin, 1984.

作の遅まきながら並外れた受容以降——『公共性の構造転換』がドイツ語で出版されたのは1962年である——⁹、旧体制期の社交空間を公共圏の問題提起の外で考察することが不可能になり、前者が後者にしばしば誤って混同されるほどであることは特筆すべきである¹⁰。開封王書によって承認されていない自発的社交組織の発展とその自律性の増大は、個人が同輩として認め合い、理性を集行的に行使する批判的公共圏の形成を可能にする。フリーメイソン会所は、宮廷社会のモデルから解放されたブルジョワ的社交の坩堝として、こうした生成過程の中心にあるが、不思議なことにハーバマスの著作にはほとんど登場しない。反対に、数年早く出版されたラインハルト・コゼレックによる『批判と危機』では、フリーメイソン会所が広範に検討の俎上に載せられている。非政治性を標榜する会所が、社会的に承認されてはいるがしばしば絶対主義によって権力の周縁におかれた貴族や、急速に台頭しつつあるブルジョワジーに対して、秘密によって保護された空間を提供したこと、そしてこの空間では掲げられた非政治性にもかかわらず、道徳の至上価値化が国家理性を揺るがしたことが強調された¹¹。この点はバイエルン光明会においてより一層明らかである。この急進的啓蒙主義に属する秘密結社は、国家と社会の改鑄を切望していたからである。啓蒙が絶対主義国家を道徳の名のもとに裁判にかけるとき、道徳的判決は政治的批判となる。しかしながら、「権力の間接的掌握のように、あらゆる啓蒙の歴史哲学の概念は政治的であることを示さずに政治的である」ことから導き出される「啓蒙の偽善」や「啓蒙の政治的秘密」は、とりわけヴィンチェンツォ・フェッローネの『啓蒙の政治』においてなされたように、コゼレックの著作に対する厳しい批判を生じさせた¹²。今日の研究は、特に文学史研究の影響のもとに、公衆の出現を目的とする出版戦略の解明へと一層むかっている¹³。

サロン、趣味の社交劇場

ルモニエによって描かれた絵画「1755年のジョフラン夫人邸の夜会」は、歴史的な真正性を全く有していないことが一般に忘れられてしまうほどに¹⁴、啓蒙期の社交に関する最も古典的な表象の一つとなっている。私的空間は公共空間と出会い、文人と社交界の住人たちは、花開いた社交界の交際に不死の生命を与えるために、ポーズをとっている。ここでは文芸趣味の娯楽と、ピエール・ベールの表現を借りるならば「文芸共和国

⁹ Jürgen Habermas, *L'Espace public. Archéologie de la publicité comme dimension constitutive de la société bourgeoise*, trad. de *Strukturwandel der Öffentlichkeit* (1ère éd. allemande 1962) par Marc B. de Launay, Paris, Payot, 1978, nouvelle éd., 1993.

¹⁰ Stéphane Van Damme, « Farewell Habermas ? Deux décennies d'études sur l'espace public », in Patrick Boucheron et Nicolas Offenstadt (dir.), *L'espace public au Moyen Âge : débats autour de Jürgen Habermas*, Paris, PUF, 2011, p.43-61 ; Jürgen Habermas, « "L'espace public", 30 ans après », *Quaderni*, n° 18, 1992, p. 161-191.

¹¹ Reinhart Koselleck, *Le règne de la critique*, trad. de *Kritik und Krise. Eine Studie zur Pathogenese der bürgerlichen Welt* (1ère éd. allemande 1959), Paris, Éditions de Minuit, 1979. フランス語翻訳では残念ながら副題が訳されていない。

¹² Vincenzo Ferrone, *La politique des Lumières. Constitutionnalisme, républicanisme, Droits de l'homme, le cas Filangieri*, Paris, L'Harmattan, 2010, p. 144-145.

¹³ Hélène Merlin, *Public et littérature en France au XVIIIe siècle*, Paris, Les Belles lettres, 1994 ; Christian Jouhaud et Alain Viala (dir.), *De la publication. Entre Renaissance et Lumières*, Paris, Fayard, 2002.

¹⁴ John Lough, « A propos du tableau de Lemonnier : Une soirée chez Madame Geoffrin », *Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, 1992, n° 12, p. 4-18.

の便り」、そして社交界の年代記が調和的に結びついている。各人は振る舞いの規範によって社交を強制されているとは感じず、自発的に規則に従っている。出席者と欠席者の中に、コスモポリタニズムを体現する文人と貴族の予想された面々を見つけ出すことができ、我々は安堵する。なぜなら、啓蒙がその頂点に達しており、パリは啓蒙の寵愛された舞台であり、パリのサロンは文芸と趣味のヨーロッパ全域から言い寄られていることを見て取れるからである。しかしながら、こうした場面の単なる観察に留まることなく、サロンの機能の仕方と論理を分析しなければならない。

旧体制期の社交形態の花形であるサロン——サロンは当時ソシエテと呼ばれていた——のうち最も重要なものは、実際に礼儀作法と趣味のヨーロッパ王国を活気づけ、社交界において権勢を誇っていた¹⁵。こうした最も有名なサロンの輝きは、その他大勢の存在をしばしば隠してしまう。無名のサロンでの会話は、文人や手書き新聞によって伝えられることはなく、公共空間において注目されることは少なかったが、局地的にはエリートによる文芸趣味の社交生活に積極的に参加していた。それぞれの水準で、これらのサロンは自らの卓越を主張し、そこに属するに値する人々を決定する権利を自らに認めていた。アントワーヌ・リルティによれば、「まさにこうした中心的地位がサロンに力を与え、ゆえにアカデミー会員への選出のためにサロンを頻繁に訪れる理由であった。ここにおいても、サロンは『文芸サロン』としてではなく、文芸共和国の制度としてでもなく、むしろ社交界と宮廷のネットワークに堅固に組み込まれた混成的〔社交〕形態として、こうした役割を演じることができた。サロンは文芸界で行動することのみならず、アカデミーへの扉の鍵を握る国王とその評定官や大臣たちに働きかけることを可能にした」。

サロンは、外国からの訪問者による書簡や旅行記のなかで数多く記述されている。ここでは、フランスの文人がうぬぼれていて鼻持ちならないと思われるときでさえ、ヨーロッパ全域で模倣されていた「フランス風の」サロンに対する同時代人の認識が、示唆に富むやり方で示されている。この観点から特に雄弁な証言を提供するのは、イタリア啓蒙を代表する定期刊行物『イル・カッフェ』の中心人物であるピエトロ・ヴェッリ（1728-1797）が弟のアレッサンドロ（1741-1816）と交わした書簡である¹⁶。アレッサンドロは、チェーザレ・ベッカリーアが『犯罪と刑罰』のフランス語翻訳者であるモルレ神父の招きでパリを訪れたとき、それに同行した。興味深いことに、この弟は最初にサロンの家庭的・物質的な次元について強調している。「私が足を運んでいる邸宅は、ドルバック男爵邸、ダランベールにいつも出会えるレスピナス嬢邸、ネケール夫人邸、ブフレ伯夫人邸、ポルトガル大使邸です。皆どこでも見事に振る舞い、上品に食事し、よく話しますが、私は自分の習慣にしたがってほとんど話しません。皆はできる限り議論しますが、その話しぶりはいつも上品です。私はマルモンテル氏と知り合いました。彼はとても善良な男で、作法は少し粗野ですが、いずれにせよ卓越した人物です。

¹⁵ Antoine Lilti, *Le Monde des salons. Sociabilité et mondanité à Paris au XVIIIe siècle*, Paris, Fayard, 2005. [この段落末の引用は、2003年に提出された博士論文からなされたものであり、2005年の刊行版では若干文章が異なる。Ibid., p. 175.]

¹⁶ Pietro et Alessandro Verri, *Voyage à Paris et à Londres 1766-1767*, trad. de l'italien et notes par Monique Bacelli, préface de Michel Delon, Paris, Laurence Teper, 2004.

[...] ダランベールについては、すべての哲学者のなかで最も偉大で優れた人物であるように私には思われます。会話においては天使のような純朴さと愛想の良さを持ち合わせています。私は本当に彼に敬服しています」(アレクサンドロからピエトロ宛て、1766年10月27日)¹⁷。アレクサンドロはこうした社交生活に参加することに心から喜びを感じていることを兄に対して隠さなかったが、前世紀から継承したモデルになお強く結びつけられた、当時の社交生活を統御する貴族的な社交規範を批判的に観察している。

「ブフレ伯夫人の邸宅の晩餐会に行きました。彼女は才気煥発で、コンティ親王に言い寄られています。彼女はそれゆえ大層尊敬されています。我々のモルレとマルモンテルは、彼女の前では非常に慎み深く席に着いています。彼女は恩給金を手に入れさせることのできる女性だからです。しかし私はこうした宮廷の雰囲気うんざりしています。私たちには関係のないことです。私は彼女の屋敷にはめったに行かないでしょう」。科学と技術の進歩が加速し、公益や人類の進歩の名のもとに称賛される時代において、科学者はサロンで高く評価されたが、彼らが機知に富み、社交界の作法をわかまえていたときには尚更そうであった。ダランベールもこの点について自ら記している。「イングランドでは、ニュートンが彼の世紀で最も偉大な天才であることで皆満足していたが、フランスでは、ニュートンに愛想の良さも求めただろう」。

伝統的貴族も新興エリートも、どこにいても自宅にいるようである。ジョフラン夫人のサロンやオルレアン公のサロン劇¹⁸、舞踏会、パレ・ロワイアルでの愛好家の演奏会や予約制コンサート、入念に組織され、公開性を備えた慈善の催し——寛大さは見られなければならないが、その規模、寛大さを示した人々の名前と無私の献身ぶりを記録すべき公衆は、慣習にしたがって、適切で敬意ある距離を保たなければならない。文人たちは知己を得、名前を認められるために、そして庇護や閑職を取得するうえでサロンの有用性を認識しており、社交空間で人間関係を統御する平等主義の建前が立場の不平等を消し去るものではないことを忘れてはならなかった。ヴォルテールもデュ・ドゥファン夫人に次のように書いている。「文人である前に社交人でなければなりません。[高等法院] 部長評定官エノーの美点はここにあります。人は彼がベネディクト派修道士のように勤勉であったことに気付くことはないでしょう」¹⁹。ジャンリ夫人も同調する。「文人はできるだけ広い世界の中で生きなければいけません。彼が一日のうち四時間を社交界で過ごしたとしても、そこで見たものについて思索し執筆するために、まだ十分な時間が残されているはずです」²⁰。

サロンという、社交界における応接間では、非礼や趣味の悪さはほとんど許容されな

¹⁷ *Ibid.*, p. 58-59.

¹⁸ マリ・ヴィリオンが私の指導下で「舞台上の啓蒙の世界：社交・卓越化・ロールプレイの間にあるサロン劇」と題する博士論文を準備し、サロンと演劇の相互作用について研究している。Marie Villion, « Le monde des Lumières au théâtre. Le théâtre de société entre sociabilité, distinction sociale et jeux de rôles », thèse en préparation sous la direction de Pierre-Yves Beaurepaire.

¹⁹ *Œuvres complètes de Voltaire, Correspondance générale*, V, Paris, chez Antoine-Augustin Renouard, 1821, p. 362. [深沢克己氏の訳を参考にしつつ、変更を加えた。ボルペール前掲訳書、42頁。]

²⁰ Genlis, Stéphanie-Félicité Du Crest comtesse de, *Adèle et Théodore, ou Lettres sur l'éducation. Contenant tous les principes relatifs aux trois différents plans d'éducation des princes, des jeunes personnes & hommes*, Maastricht, Dufour et Roux, 1782, tome II, p. 107. [深沢克己氏の訳を採用した。ボルペール前掲訳書、42頁。]

かった。嘲笑の言辞がそれらを容赦なく罰し、逸話がそれらについて悪意ある報告をした。初めてサロンに出席した際に、社交界の行動規範と礼儀をわきまえていることを示せず、平等主義の建前、友情と慎み深い善行と承認の言語によって統御された象徴的エコノミーに適応する能力を示せない厄介者に、席が与えられることはない。最上位のサロンにおける文芸趣味の娯楽の供給者であったシャルル・コレに言わせると、文人が受け取る無私の善行は「庇護的礼儀」であった。これは無償ではなく、むしろ対抗贈与を前提としていた。上流社交空間を統御する規範を内面化していることを、慎み深くではあるが、繰り返し表明しなければならない。

ある作家やあるブルジョワが高貴な生まれの人々と付き合い合わないことについて、私はよりもっともな理由を知っています。私自身もこの理由で彼らを避けることを決意しました。それは生まれと偏見が彼らにもたらした優越の態度です。彼らは礼節の外観のもとにできる限り巧妙に隠そうとしますが、その意に反して、こうした態度は常に露見します。彼らの「庇護的礼儀」は感受性の強い人にとっては一種の侮辱となります。対等な者の間で自由に生きられるのに、主人を持ってどうなるのでしょうか。あなたが娯楽や気晴らししか与えない相手のうちに嫌悪を探しだしてどうなるのでしょうか。もし大公、フランス元帥、公爵、領主、男爵の話をするだけで目的ならば、卑屈でちっぽけな虚栄心に騙されていることにほかなりません。もし思慮分別と規律を備えた野心を動機とするならば、彼らと会うのは束の間に留め、決して彼らと付き合いはいけません。彼らと会うわずかな時間に、自らの才能を増大させるために彼らについて多く学ぶこと、その一方で自らのわずかな財産を増やすために礼儀正しく彼らを役立てること。以上が、私が実践しようと努め、常に満足を見出してきたやり方です。極めて裕福な人々もおおむね大貴族の地位に含めていることを付け加えておきます。一般に、裕福な人々と過ごす、高貴な生まれの人々と共に過ごすときに被るのと同じ不都合に出くわすことになるでしょう²¹。

同様に、女性もこうした文芸趣味の上流社交空間に自立的に参加したいと切望するならば、規範を承諾していることをあらかじめ表明する必要がある。女主人の役割を演じなければならないのである。もし女性が文筆を夢見るならば、書簡という二義的・女性的であるとされたジャンルが彼女らに割り当てられた。それを理解しなかった女性は不幸である。才人を気取り、文芸における榮譽を追い求める女性は、嘲笑と繰り返される象徴的侮辱の対象となった。ほかの女性たちは批判や嫌疑を鎮めたあとでようやく、制約を少しずつ緩め、「規範と交渉」し、自律性を獲得することができた。より一般的に、女性とその文化的・芸術的な実践に関する近年の研究のすべてが、公共空間および社交領域において女性に重くのしかかる制約を明らかにしている。女性の芸術愛好家を研究するイザベル・ボディノは、マリ・ディラニという注目すべき事例を通じた、女性の貴族的社交関係の研究や、「職業」という社会的範疇に属する芸術家の展示に関する研究を経

²¹ Charles Collé, *Journal historique, ou mémoires critiques et littéraires sur les ouvrages dramatiques et sur les événements...*, Paris, Imprimerie Bibliographique, tome III, 1807, juin 1765, p. 195.

て、「ピクチャレスク」な作品のコーパスに関する研究へと到達し、芸術の愛好家的実践をジェンダーの視点から論じ、イギリスの女性芸術家の職業的・愛好家的地位が多義的・流動的であったことを明らかにした。結婚はしばしば職業女性にとってキャリアの放棄を含意した²²。女性は最も高貴な絵画のジャンルから排除され、「手工芸」や静物画を割り当てられ、輝けるはずもなかった。女性の余暇としてデッサンが推奨されたのは実利的使用という理由からであり、女性は自らの芸術的偉業を「ひけらかす」べきではなかった。パフォーマンス能力は社交関係そのもの、および、それと競争心との関係を理解する上で重要であるけれども、彼女たちのものではなかった。

兄弟団からフリーメイソン会所へ

社交性の「製作所」での役割配分において、第一の重要性が長らくフリーメイソンに与えられてきた。革命の前夜、人口 2850 万のフランスにはおよそ 900 の会所、4 万から 5 万の会員が存在した（比較するならば、2014 年のフランスには、6600 万の人口に対して 13 万から 14 万のメイソンが存在する）。メイソンがルイ 15 世期に行った様々な試みにもかかわらず、権威から公的承認を与えられていなかったことを強調するならば、こうした成功はより一層注目すべきであろう。とはいえ、メイソンに対する庇護は数多く見られ、効力を発揮しており、その発展は 1740 年代末以降、もはや妨げられなくなっていた。フリーメイソン団が君主とその代理人に向けて表明した忠誠・忠実・社会的順応主義の証は、きちんと受け入れられた。都市的現象であるメイソンの社交関係は、大港湾都市や高等法院都市、軍事的拠点において特に活発であったとはいえ、小規模な市場町にまで存在した。上流階層の会所はしばしば男女混成（採養会所あるいは「貴婦人メイソン団」と言われる）であり、夏や高等法院の休暇の間は会員の誰かが所有する農村部にある余暇のための城館に集まることを厭わず、狩猟会、舞踏や文芸趣味の娯楽や愛好家による演劇、ジュ・ダドレス〔射的などの器用さを競う遊戯〕を行った。したがって、フリーメイソン会所の活動は、特殊メイソンの活動である象徴的儀礼の実践、新会員の加入儀礼や昇位儀礼に限定されていなかった。

先に言及したように、1966 年に刊行された『改悛苦行兄弟団とフリーメイソン』に関するモリス・アギュロン²²の先駆的研究は、改悛苦行兄弟団とフリーメイソン会所との間に構造的な親族関係と形態上の類似を示し、18 世紀後半にエリートの中に生じた前者から後者への移行を明らかにした。上流にある兄弟団と下流にある革命期・第一帝政期の社交サークルの中間に位置するフリーメイソン会所は、社交関係の変容を断絶させることなく引き起こしていた。つまり、世俗化、手続きと加入の個人主義化、統制権力（政治権力・都市政体・宗教権威）に対する社会的領域の自律化、そして、特にキリスト教的善行から世俗的博愛への変容という回路を経由した、公的領域（シテ）への進入という意味での政治化である。こうした分析は、伝統的ないし旧体制に属すると言われる社交形態が持つ柔軟性、すなわち現会員と潜在的会員の期待に 대응するために自己変容する能力を際立たせる。確かにプロヴァンス地方の改悛苦行兄弟団の事例では、「[構成員の

²² Isabelle Baudino, « Pour l'amour de l'art ? Les enjeux de la pratique amateur de l'art dans l'Europe des Lumières », communication orale présentée lors de la journée d'études organisée à l'Université Nice Sophia Antipolis le 13 septembre 2013.

うち]より数が多く、より良識がある部分」のフリーメイソン団への移行が認められるし、同様に、聖セバスティアヌス兄弟団は「高貴な射的会（騎士団の社交組織で行われるジュ・ダドレス）」から会所へ向けて出発した。しかし、これは断絶でも、帰還の考えのない旅立ちでもなかった。今日、社交はネットワークとして捉えられるべきである。複数団体への加入は一般的であったし、組織の名声と活力、新会員を引き寄せたり思いとどまらせたりする一会員の影響力、そして程度の差こそあれ、その他のあらゆる種類の状況的な理由に応じて選択はなされたが、それは最終的な決定ではなかった。もしある兄弟団が世俗の地位にしたがい会員採用の基準を引き上げることに成功するならば、都市エリートの代表者は兄弟団に戻ることに、あるいは少なくとも名誉会員として会員名簿に名前を連ねることに合意できた。

プロヴァンスの事例は例外ではない。アヴィニオン（クロード・メリアン）、サヴォワ（ジャン＝ニコラ）、ピュイ＝アン＝ヴレ（ピエール＝イヴ・ボルペール）、トゥルーズを中心とするミディ＝ピレネ地方（ミシェル・ティユフェール）においても、フリーメイソン会所と改悛苦行兄弟団の間には、興味深い偏差はあるものの、非常に豊かな関係が存在した。トゥルーズでは、脆弱な財政状況とある種の霊的衰退にも関わらず、兄弟団は会員の社会的構成を羨望的となるような高い水準で維持することに成功し、会所への人員流出を抑止したけれども、メイソンとの間に良好な関係を保ち続け、自分たちの礼拝堂に義務のミサや葬送の祈祷のためにメイソンを迎え入れた。実際、これら二つの組織の間には、競合だけでなく補完性が明らかである。そもそも当の会員たちは構造的な親族関係を感じ取ることしかできなかった。これらはともに男性の組織であり、そこでは友人たちが、現会員による新会員の選考と加入儀礼を経たのちに兄弟として相互に承認しあい、世俗の位階秩序に配慮しつつも同輩として役職者を選出し、祝宴の社交やキリスト教的慈善を行っていたのである。

旧体制期のメイソンの社交形態の歴史を描くならば、18世紀に世俗化しつつある自発的社交形態の登録簿にフリーメイソン団とそのネットワークが常に記載されていることを指摘する一方で、二つの時期を区別することができる。世紀半ばにメイソンの社交関係は、フランス、ヨーロッパ、植民地世界に普及し、会所は兄弟・潜在的入会者の育成の場も十分でないまま、時に過剰なまでに増加した。会所はいまだに兄弟団から十分に切り離されておらず、会所と兄弟団への同時加入は頻繁に行われた。フランス王国南部の辺境に位置するペルピニャンにおいて、1744年11月6日にカタルーニャ地方最初の会所が設立されたのは、こうした拡大運動を反映している。疑わしさは残るものの、この会所の初期の名前とされる「聖ヨハネ」あるいは「聖ヨハネと聖ペテロ」、そして、この会所が1772年5月18日にフランス大会所によって再公認された際に採用した名称である「聖ペテロと聖パウロ」は、当時支配的であった聖人名の総覧に準ずる。しかし、1782年、メイソンの社交形態が強固なアイデンティティを練り上げたときには、このカタルーニャの会所はフランス大東方会に「以前の団体〔フランス大会所〕から承認された聖ペテロと聖パウロという名称に代えて」、「社交性」という名前で再公認されることを要求した。フランスでこの名称を採用した唯一の会所であるけれども、この選択は上流階層のメイソンの社交形態の変容を典型的に示している。この会所は実際に「貴族の会所」としてしばしば認められており、地方内部での社会的優越を確信しながら、「品行

方正と美德の模範を示すことを喜びとする、ルシヨン地方の貴族身分の選良からほぼ完全に構成されている」と称した。同時期、パリの最も輝かしい会所の一つである「結集友人」会所は、総徴税請負人、プロテスタント大銀行業者、国際金融業者、音楽愛好家や高位身分の外国人から構成されており、上流階層のメイソンの社交関係の性質について考察している。この会所はその「黄金の書*」にこうした熟慮の成果を残している。会所はどちらかと言えば会合記録を保持することが多いだけに、これは希少価値のある証言である。兄弟が「イギリス風クラブに似た交友会を形成することを欲していた」こと、そして「黄金の書」の余白には「クラブはフランス語でコトリ(coteries)」と呼ばれること、続くフォリオでは「会所が」「廉潔の士のコトリ」であることが明示されている²³。このように「社交メイソン界」とでも呼べる現象が、愛好家の舞踏会、採養会所、サロン劇、入念に組織された慈善の催しを伴いながら発展し、旧体制期エリートの期待に完全に応えたのである。

18世紀の社交性の「製作所」を理解するためには、ハーバマスのモデルは刺激的であるが、理論的モデルに過ぎないので、社会的実践の光のもとに検証しなければならない。ところで、権勢を誇った「社交メイソン界」は、メイソンたちによる趣味と卓越化の劇場への関与や社交界の娯楽の供給を引き受けつつも、共有された加入儀礼の絆がもたらす還元不可能な差異のおかげで、娯楽の中で溶解してしまうことはない。こうした社交メイソン界は、最上流階層の会所の狭いサークルをこえて認められる、社交の貴族モデルの広がりを実証する。

アカデミー、伝統と近代化の間で

サロンやフリーメイソン会所の成功に、研究史は長らくアカデミー運動の停滞を対比させてきた。こうした文脈では、公開講義を組織し、アカデミーの活動よりも有用で実用的な教育を授ける展示協会運動の拡大は、アカデミーの行き詰まりや、アカデミー会員が見せた、知の産出と普及に最前線に関与することへの躊躇に対する応答として解釈された**。そして、アカデミー自身が啓蒙の世紀の黄昏に自らの有用性について自省していたことが強調された。事実、『現代の詐欺師、あるいはアカデミーのいかさまに関する書簡』と題された、1791年のジャン＝ポール・マラーによるアカデミーの無用性に関する誹謗文はよく知られており、とりわけ次のように書かれている。「科学の研究は非常にまれにしか真正の光明をもたらさず、ほぼ常に迷信に対する軽信を生じさせる」。「きみはこれらのアカデミー会員殿が今世紀の光明に対して抱く信頼や、彼らが理性の進歩や真理の統治に関して絶え間なく交わし合う賛辞に驚くだろう」（第二書簡）。しかし、

* 「黄金の書」とは、18世紀末から19世紀初頭に見られた、フリーメイソン団の規約や決議、役職者の選出と任命に関する記録簿のことである。

** 文芸や学問の振興と普及を目的とする愛好家の社交組織のうち、開封王書により公認されたものはアカデミーと呼ばれる。その設立は17世紀半ばから18世紀半ばに集中した。1760年代以降になると、社団として公認されていない文芸協会や読書室の設立が増加した。1780年代にパリやボルドーで設立された展示協会（ミュゼ、リセ）は、絵画や彫刻などの芸術作品、学問的・技術的発見の展示や実演を目的とする社交組織である。

²³ Archives nationales, 177 AP 1, papiers Taillepiep de Bondy, Livre d'or des Amis Réunis commencé le 16 février 1777, folios 7-8.

このように言うのは、かつてアルトワ伯の邸宅付き医師であったマラーが、アカデミーによる承認を切望していたことを早々に忘れるためではないだろうか。

科学史研究が明らかにするところによれば、王立科学アカデミーは、科学的知識と学者の正統化、経験や知識の普及、科学界の組織化を担う機関として、中心的な役割を果たしていた。早くも1699年に、規約第31条はとりわけ科学的発見の鑑定をアカデミーの任務とし、その目的を王国にとって有用な科学と研究を決定することに定めた。「アカデミーは、王の命令に従い、陛下に対して特権申請がなされた機械について検査し、それらが新しく有用であるかを保証する。そして承認された機械の発明者には、アカデミーにその模型を一つ残すことが義務付けられる」。

数多くの地方アカデミーの社会的保守主義は、議論の余地のない事実である。オティウム〔閑暇〕の悦楽、貴族の余暇は、無私で卑しい物質的利益を追求することなく、「愛好家」——本質的に重要な観念である——としてムーサを崇拜し、芸術にいそしむことを可能にするが、ネゴティウムの制約とは相いれない。ネゴティウムとは限られた時間のことであり、この語のあらゆる意味において商売の時間のことである。卸売商が地方アカデミーへの入会を望んでいることを表明したとき、たいていの場合、しぶしぶ認められたのに対して、高等法院司法官や高位聖職者の代表者たちはこうした静謐なサークルの席を占め、博物収集室を結集させる「生まれつきの」使命を帯びていとされた。貴族的社交とアカデミー運動の間に関係があることは明らかである。それは、参加者の間で会話が自由に展開される、くつろいだサロンに対して、革新の精神にとっては仰々しく堅苦しいアカデミーの会合、という性急で戯画的でさえある区別に含みをもたせるだろう。さらに、開封王書による公認の取得時期にばかり関心を寄せ、アカデミー運動史を行政的・事件史的な観点からのみ読み解くことをやめなければならない。旧体制期において、アカデミーの制度化は、社交組織の公的有用性の承認の過程において重要ではあったが、それは社交の過程と本質を覆い隠すものではないはずである。それゆえ、旧体制期ディジョンのアカデミー運動の豊かさを理解するためには、高等法院部長評定官ブイエの影響力と、彼の自宅で開催される集会の自由、つまり「彼の」アカデミーの自律性に対して彼が抱いた深い愛着を踏まえておく必要がある。こうした社交モデルは、多様な活動と多数の組織への所属を柔軟なやり方で同一の精神に結びつけるものであり、ヨーロッパ中で普及し承認されることになった。まさにそのおかげで、啓蒙期のエリートたちは、サロン、会所、アカデミー、演劇や音楽の愛好家的活動を目的とする団体等、どこにいても自宅にいるように感じられた。

アカデミーを新しい社交組織〔展示協会〕と対比する前に、アカデミーがそろって公的有用性、教育的要請、文化的仲介者としての役割を重要視していたことも指摘しなければならない。ディジョンの事例——モデルでもある——に戻ろう²⁴。1770年、高等法院司法官ルグ・ド・ジェルランは、9000平方メートルの土地に植物園と温室を自費で設立し、植物学の講座を創設することを申し出た。アカデミーは承諾し、そしてビュフォン伯が活動を後援した——この地方出身の偉大な人物が正統性と庇護を与えたのである。「植物園の人々に何らかの形で貢献することは非常に喜ばしいことだろう」。制度化

²⁴ この点については、パトリス・ブレの仕事を参照せよ。

の過程が次のように続く。開封王書が1772年に取得されると、作成された規約により植物学教授の義務と採用の規則が定められた。1773年6月20日には、アカデミーの公開会合が植物園で開催され、植物学の最初の講義が行われた。この時、篤志家である高等法院司法官、アカデミー終身書記と植物学教授が順番に発言をした。篤志家の個人的発意、アカデミーによる承認、および王国の諸権威による公的有用性の承認の「公表」が、この企ての最後を飾り、それが幸運にも突破した諸段階と、それを成功に導いた支援が、調和的に結び付けられたのである。

これらの状況において、展示協会はアカデミーの競争相手であるだけでなく、教育的措置や実用的なものも含めた新しいディシプリンへの開放を前面に打ち出すことでアカデミーを補完し、啓蒙思想によって描かれた功利主義的展望の普及を加速させた。展示協会の創設が証明するのは、旧体制末期の改革主義エリートが、開封王書によって承認された社団とその社会的・文化的順応主義の枠外で非カトリックや商人にも開かれた組織を提案しながら、アカデミー的社交形態の領域を刷新する意思を持っていたことである。1783年に設立されるやいなや、ボルドー展示協会が「芸芸の筆頭にあり、かくも有益でかくも軽蔑されていた」商業を称賛したのに対して、アカデミーは依然としてネゴティウムを軽視していた。展示協会は、より広範な公衆に自らを開放しようとしており、数学、化学、物理学、解剖学、外国語、デッサンの講義を提案し、時に正真正銘の自由教育の高等機関になるほどであった。そして、活動報告書、さらには定期刊行物を出版した。このようにして、展示協会は才能あるブルジョワジーの文化的渴望に答えていた。彼らは、選良的だが排他的ではない会員から成るこうしたサークルにおいて、学芸にいそむことができた。教育的・博愛的な計画を備えた展示協会の哲学は、最も活動的なフリーメイソン会所のそれと似ている。

そのうえ、社交の次元における真の一致や補完性をよく示すのが、メイソンたちが、様々な展示協会の設立において決定的な推進力を与えていることである。パリでは、「九詩神」会所（エルヴェシウスによる「科学」会所の構想から生まれた）が、「科学と芸術を涵養するフリーメイソンの団体」であると自己定義しているが、1780年のアポロン協会の起源となり、後にクール・ド・ジェブランのパリ展示協会となる。その競合団体となるのは、メイソン会員ピラートル・ド・ロジエが創設し、将来、リセとなる科学展示協会にほかならない。ボルドーでは、150名の展示協会会員のうち55名がフリーメイソンであったことがはっきりと確認されるが、ジョエル・クチュラは、フリーメイソンへの二重所属は、展示協会の会員の大半に及んでいたと推測する²⁵。展示協会の計画が、地方長官や市政に関わるエリートからの支援を得られず、実現しなかったときでも、フリーメイソンは、依然として同じような野心を持つ団体の起源であったことを指摘しておこう。リールの真理探究者会、メスの文芸愛好者会の場合がそうである。さらにサン＝ドマングの兄弟愛者サークルは、植民地で唯一のアカデミー組織であるが、アカデミーと展示協会の中間的な性格を持ち、メイソンによって活気づけられ、豊かな通信網を

²⁵ Johel Coutura, « Le Musée de Bordeaux », *Dix-huitième siècle*, n° 19, 1987, p. 149-164. ボルドー展示協会に関する知識はカロール・ラティエの未刊行博士論文によって刷新された。Carole Rathier, « Les réseaux des Lumières à Bordeaux : étude de correspondances (1768-1788) », soutenue à l'Université Michel-de-Montaigne Bordeaux 3, 2007.

与えられていた。それゆえ、フリーメイソン会所は旧体制の社交関係の交差点として現れ、旧体制解体の梃子ではなかった。会所は、兄弟団の世界から生まれたがクラブではなく、有力者の庇護を育んでいたが国家権力の外部で組織され、社会的紐帯の頹廢に対する危惧を表明しつつも社交生活の活性化という要求を掲げたのである。

公衆、「社交界の科学」、社交関係

18世紀において公衆は、アカデミーと特に科学者や展示協会の重要な対話の相手であった。実際、伝統的な観点から公衆に自らを見せるのと同時に、技芸や趣味の修得、知的好奇心のセンスがもたらす社会的優越を承認されること、さらには、公衆・公的有用性・一般利益に関する感覚を保持していると表明することが重要であった。意味深いことに、物理学や化学の実験は社交組織の会合において高く評価され、博物収集室の外でも「愛好家」たちを熱中させた。学者たちの文通はこの観点から研究者たちの関心を集めている。というのも、アカデミーの報告書の読者サークルをこえて、開明的な公衆に向けて、最新の発見を知らしめる科学書のなかで、書簡がしばしば証明書類として公表されているからである。ポルトガル出身の天文学者ジョアン・ジャシント・ジ・マガリャンイス（1722-1790）は²⁶、科学史家・技術史家には科学機器の製造者としてよく知られているが、彼の書簡——出版が予定されている——は特徴的である。この事例は学者たちが書物、出版された書簡の抜粋、学術雑誌、実験の報告書といった様々なコミュニケーションの媒体を連結させられること、そして彼らが学術アカデミー、科学実験室、私的空間と社交組織といった研究と社交が結びつく諸空間に入り込めることを明らかにしてくれる。

ジョーゼフ・プリーストリによる『様々な種類の気体に関する実験と観察』は、ロンドン発 1776年11月30日付の「王立協会会員」J＝イアサント・ド・マジュラン氏によるリンに関するいくつかの実験と、水に二酸化炭素を吸収させる方法[...]に関する書簡」を公表した。

私は昨夜オランダ・フランドル旅行から [ロンドンに] 到着したばかりですが、一刻も早くあなたにある物理学の現象についてお伝えしたいと思います。私が初めてそれについて聞いたときと同様に、あなたにとってもそれはきっと快いものとなるでしょう。ライデンに到着したとき、私は高名なアラマン教授のもとを訪れました²⁷。彼は親切にも物理学の器具の見事な収集品を私に見せてくれました。 [...]

二日後、私はアラマン教授とともに、再びデンハーグに行きました。そこにゴビウス教授が²⁸、ロシア皇帝大使で、彼の身分で最も聡明な物理学の愛好家でもある大公ゴリツィンの勧めで²⁹、様々な種類の気体に関するあなた方の実験の幾つかをわざわざ

²⁶ ジョアン・ジャシント・ジ・マガリャンイスは、ポルトガルの外ではジャン＝イアサント・ド・マジュランの名で知られている。

²⁷ ジャン＝ニコラ＝セバスチャン・アラマン（1713-1787）はライデン大学の哲学と自然史の教授である。

²⁸ ヒエロニムス・ダヴィド・ゴビウス（1705-1780）はライデン大学の医学・化学教授である。

²⁹ ゴリツィン大公ドミトリ・アレクセーヴィチは、在デンハーグのエカチェリーナ2世の大使で、

ぞ見に来たのです。私はこの大公に実験を見せることになっており、私が出発する前にイングランドから彼のもとに実験に必要な器具を送っていました。この集まりでは、私は先ほど話をしたボローニャでのリンの実験を話題にしました。アラマン教授がそこにいたヘムステルホイス氏を証人として呼びました³⁰。彼は物理学の実験に通暁している学者であり、ちょうどデンハーグに滞在していました。彼はアラマン教授の実験にも出席していて、同じ現象を目にしたことがあると保証し、実験の成功は用いられたガラスの良質さと、そしておそらく実験した際の太陽光線の強さの度合いに依存しているという事情を補足し、私の考えを裏付けてくれました。[...] 以上の他に、私はイタリアから真正な書簡を受け取っています。それによれば、ベッカリーア神父 [ジョヴァンニ＝バティスタ・ベッカリーア 1716-1781] によるこの実験の再現に立ち会った、ある若いイタリア人貴族が、彼の教育係である二名の貴族とともに同じ現象を目にし、リンの色彩が暗闇の中で見たときにはあまりにはっきりしていたので、会衆は、それと知らされることなく、それがリンを太陽にさらすのに用いたガラスの本当の色彩であると言い当てたそうです³¹。

書籍商の側ではカタログに科学書を掲載するようになり、それは数のうえでは限られているが、知識に飢え、熱中する公衆に迎えられた。例えば、サンクトペテルブルクの帝国科学アカデミー御用達の書籍納入業者であったパリの書籍商アントワヌ＝クロード・ブリアソンは、書籍市場におけるジェネラリストの立場を放棄することはなかったものの、科学書に関する関心を育んだ。1754年にベルリンのアカデミー書記ジャン＝アンリ＝サミュエル・フォルメに宛てた書簡において、彼は、科学書が文芸書に比べて海賊版の被害にあいにくいこと、それゆえ、この分野を扱う書籍商は競争の影響を受けにくいことを力説した。「それ [偽造] は製作が容易で売れ行きの良い作品の運命です。だからこそ、私は外国との取引において科学書を好むのです。私は科学書をあまり多くは販売していませんが、多くの場合、[科学書を販売する] ただ一人 [の書籍商] であるおかげで確実な商売をしています」³²。彼の営業標章は、「科学と守護天使に捧げる」から「科学に捧げる」——包括的な意味で理解された科学である——へと変わった。そのとき、彼のカタログでは実験・精密科学が、法や文芸を犠牲にしな——それでも消滅することはなかったが——、次第に重要性を増していた。さらに、サビヌ・ジュラティクは、パリの主要な書籍商の一つであるドサン社の方針の変更に言及する。ドサン社は、1760年代以降、[王立科学アカデミーによる]『技術工芸の解説』の出版や、王立コレージュ教授ジェローム・ラランド著『理論的・実践的天文学論』の出版とともに、科学書

ディドロの友人でもあり、科学の実験で有名であった。

³⁰ フランツ・ヘムステルホイス (1721-1790) はネーデルラント連合州の哲学者、1772年に出版され、ディドロが論評した『人間とその諸関係に関する書簡』の著者として知られている。

³¹ [Joseph Priestley], *Expériences et observations sur différentes espèces d'air. Ouvrage traduit de l'Anglois de M. J. Priestley, Docteur en Droit, Membre de la Société Royale de Londres, par M. Gibelin, Docteur en Médecine, Membre de la Société Médicale de Londres*, Paris, chez Nyon l'aîné, 1780, avec approbation et privilège du roi, tome cinquième, p. 70-77.

³² Sabine Juratic, « Publier les sciences au 18e siècle : la librairie parisienne et la diffusion des savoirs scientifiques », *Dix-huitième siècle*, n° 40, 2008, p. 301.

を重視しはじめたのである³³。科学者たちは、威信ある団体に所属し、彼らの印刷・出版業者として特定の書籍商を指定されていたときでも、しばしば著者勘定契約で出版した。事実、書籍商は、彼らの原稿の出版経費を負担しようとはしなかった。そのため、著者たちは、製本と出版企画の成功に特別の関心を寄せるようになった。彼らは、正真正銘の出版戦略を練り上げ、原稿が印刷業者に委ねられた途端、それに対する興味を失うようなことはなかった。同じ観点から、彼らは友人である学者を通して、原稿を知らしめ、一般的・専門的な学術誌に書評や広告の掲載を求めることに気を配った。彼らは文通、抜粋——面白いページであれば、雑誌にとっても幸福である——や要旨の出版、サロンにおける朗読、アカデミーによる正統性の承認の過程で重きをなす学術団体や人物に対する献呈を通じて、あたかも学術書の普及活動を展開しているようなものであった。出版された著作をめぐる議論や論争もまた、科学者の狭いサークルをこえて、書名と著者名を知らしめた。

公開講義もまた特別の重要性を持っている。公開講義において科学は劇場化され、物理学の領域ではしばしば、一種のスペクタクルとなった。このようにして公開講義は大成功をおさめた。公衆の殺到は、公開講義の有用性と、最大多数に対する啓蒙の進歩への貢献を正当化する。公開講義は[公衆に啓蒙の進歩への貢献という]使命を生じさせ、庇護者からの寄付を促し、特に地方の主要都市では、実験者や文化的仲介者としての役割を[公衆に]認めさせる機会を学識ある愛好家に提供した。

まもなく50年を迎える研究の蓄積にもかかわらず、社交性の「製作所」は、研究者の関心を集め続けている。エゴ・ドキュメントの調査と個人書簡の出版は、完遂にはほど遠いが、研究の関心を、偉大な人物から、啓蒙の世紀の社交の主体・促進者たちの普通の——したがってより代表的な——プロフィールへと、しばしば脱中心化させている。同様に、歴史家は愛好家や目利きという人物像に関心を向け、彼らが文学や美術の専門職業化の非直線的な過程や美術の批評空間の出現に対して有した複雑な関係を再検討することによって、芸術界を把握し直し、専門知識や鑑定という観念について検討し続けている。それゆえ作業場は開かれたままである。

ニース大学近世史教授

³³ *Ibid.*, p. 309-313.

解説

田瀬望

本稿の著者であるニース大学近世史教授ピエール＝イヴ・ボルペールは、2009年に出版された『「啓蒙の世紀」のフリーメイソン』（深沢克己編訳、山川出版社）によってヨーロッパ・フリーメイソン史研究の第一人者として認知されているだろう。精力的に研究成果を公表し続けるボルペールは、2011年に伝統ある出版社ブランからジョエル・コルネ監修のフランス史叢書の一冊として、836頁の浩瀚な通史『「啓蒙の世紀」のフランス』を刊行し、40代後半にしてフランスを代表する18世紀史家となりつつある。今回、わたしたちが訳出した論文は、フランス18世紀研究会によって発行されている雑誌『18世紀』46号（2014年）において組まれた特集「今日の18世紀研究」の第一部「今日の18世紀研究の総括と展望」に寄せられたものである。ソシアビリテ概念を歴史学に導入したモリス・アギュロンの死から三ヵ月後に公表されたこの論文は、およそ半世紀にわたる研究動向を批判的に検討しながら、サロン、アカデミーと展示協会、兄弟団とフリーメイソン会所が織りなす啓蒙期フランスの社交空間に関する優れた見取り図を提示している。

翻訳に際しては、本文に頻出する「ソシアビリテ」という語をカタカナ表記のままにすることを最小限に留め、文脈に応じて社交性、社交形態、社交組織、社交空間、社交関係などと訳し分け、わが国で定着しつつあった「社会的結合（関係）」という訳語を採用しなかった。その理由について説明するために、ソシアビリテ概念が問題発見的な歴史記述の道具として、18世紀フランス社会文化史研究の中で、どのような領域を切り開いてきたのかを確認しておきたい。ここではアギュロンの問題関心と結社史の構想にいま一度立ち戻っておこう。

よく知られているように、アギュロンは1966年に出版された著作において、民俗学者フェルナン・ブノワの仕事から着想を得て、1848年のヴァル県住民の民主的政治行動の起源を南仏人の地域気質とみなされた社交性に求めた。こうした仮説を検証し、集合心性としての社交性を「客観的に」捉えるために着目したのが、自発的参加の原則に立脚し、会合や交流そのものを主な目的とする結社である。のちに『ブルジョワ的フランスの社交サークル』（1977年）の序文で詳述されるように、地域における自発的結社の密度と活力が「公共的關係を濃密に生きようとする住民の一般的性向」の指標であると仮定し、特定の社交組織や社交形態(*institutions ou formes de la sociabilité*)に関する具体的研究を行ったのである。アギュロンの仕事は、従来、宗教史・思想史・政治史で別々に扱われてきた兄弟団・会所・政治結社を、各々の目的や外観の差異の背後にある構造的親族関係を明らかにしながら、「結社の歴史」という視野のもとに社会史の正統な研究対象として確立した点で画期的であった。

アギュロンの著作は、組織化・制度化されていない社交関係も含めて社会的結合関係全般に関する議論を活発化させたが、彼自身が「ソシアビリテの歴史家固有の領域」として念頭においていたのは、家族の親密圏と国家の政治的領域の間に広がる中間領域に組み込まれた自発的結社であった。事実、1984年に出版された第三版の序文では、アギュロンは批判を受けてソシアビリテ概念による問題提起から地域気質との連関という側

面を後退させる一方で、「自発的選択によって組織され、多少なりとも制度化された集団生活の歴史」をそれ自体として耕し続けることを呼びかけた。そこではまた、18世紀半ばから19世紀半ばにおける「旧体制から革命期・ポスト革命期世界への移行」期に生じた政治的・社会的・文化的変容の一つとして、自発的結社の増加と変容の問題を位置づけるのみならず、ジンメル社会学の社交論を紹介しつつ、ノルベルト・エリアスの『文明化の過程』が示した展望に結社史を接続させる可能性を示唆しながら、研究の方向性を示したのである。

ボルペールはこうしたアギュロンの結社史とダニエル・ロッシュの文化的社交組織研究を継承しつつ、エゴ・ドキュメントを広範に渉猟し、社会ネットワーク論を積極的に摂取することで発展させている。その魅力を簡潔に述べるならば、団体的編成の外部・身分制社会の間隙において開拓された結社の自由の領域を、公的領域と私的領域を架橋し、旧体制期エリートの期待に柔軟に応える社交空間・ネットワーク (*espaces et réseaux de sociabilité*) として提示し、そこに啓蒙期から19世紀半ばまでのフランス社会の骨組みを形成・動揺・再編する原動力を見出そうとする点にあるだろう。

わが国では二宮宏之によってソシアビリテ概念が導入され、日本史・東洋史・西洋史の垣根をこえて多くの議論と研究を促した。フランス史の領域においては、近世パリ政治社会の再編を論じた高澤紀恵、19世紀民衆の社会的結合に関する喜安朗、工藤光一、榎原茂らの仕事を中心に豊かな成果が蓄積されてきた。18世紀についても、2005年以降、革命期ルアンの政治結社と文化変容を論じた竹中幸史、『アソシアシオンで読み解くフランス史』（福井憲彦編、山川出版社）に続いて、深沢克己によるフリーメイソン史研究の問題提起と一連の共同研究、トゥルーズの地方アカデミーとアカデミー会員に関する山崎耕一の著作、パリ王立科学アカデミーに関する隠岐さや香の仕事、池上俊一と河原敦によって編まれた中近世の兄弟団に関する論文集がわたしたちの蒙を啓きつつある。これらの研究と合わせて、本稿が啓蒙期フランス・ソシアビリテ研究のさらなる展開の出発点となることが期待される。

最後に、翻訳を快く許可して下さったボルペール先生、本文の校正を担当して下さった編集委員の楠田悠貴さん、訳稿に丁寧な目を通しコメントを寄せて下さった舘葉月さん、本文中に登場したラテン語表現の訳に関してご教示下さった梶原洋一さんに心から御礼を申し上げたい。